都道府県別賞一等

命に寄り添う

埼玉県　川口市立高等学校附属中学校　二学年　真北　理仁

私の母は、私が生まれる前まで生命保険会社に勤めていました。新卒でコールセンターに配属になりとても大変だったそうですが、ひっきりなしにかかってくる手続きの電話に、こんなにも世の中で生命保険が活用されているのかと毎日驚いていたそうです。

その中でも特に印象に残っているのが、若くしてご主人を亡くされた奥様とのやりとりだそうです。暗く沈んだ声にどう声をかけていいのか悩んでいるうちに、その悲しさが伝わって母も一緒に泣いてしまったとのことでした。しかし、そのご主人は自分に万が一のことがあっても家族が困らないようにと家族のことを一番に考えた生命保険に入っていて、母が一生懸命その保険の内容を説明しているとご主人の家族に対する思いが伝わったのか、

「自分達のために主人はこんなにも色々と考えてくれていたのですね。気持ちに寄り添ってくれてありがとう。どうしたらいいのかとても不安で泣いてばかりだったけれど、これからもずっと主人が見守ってくれているように思えます。」

と、とても安心された様子で電話を終えられて、母も心の底からほっとしたとのことでした。この話を聞いて、『今、当然のように過ごしている毎日の生活が、突然失われたらどうなるのだろう』と私はとても不安になりました。そして、保険というものをきちんと理解し、自分も家族の一員として万が一のときに備えたいと考えるようになりました。

以前まで、中学生の自分には〝生命保険〟といわれても漠然としたイメージしか湧かず縁がないものと思っていました。しかし、なんと私が生まれるときにも生命保険が役に立ったと母から聞いて、ごく身近で自分達を支えてくれる縁の下の力持ちのような存在だと、とても頼もしく感じました。そして、生命保険といっても亡くなったときだけの保障ではないそうです。命が誕生するとき、事故に遭いケガをしてしまったとき、長い闘病となったとき、日常生活を送る上で避けて通れない様々なリスクから私達を守ってくれているのです。また突発的な保障以外にも、将来年金として受け取れたり、貯蓄できる保険であったり、長寿時代を不安なく迎える準備ができるものもあると知りました。さらに生命保険は保険料においても、受け取った保険金においても、税金の面で優遇されているとのことです。目に見えない保障だからこそ、たくさんのメリッ

トを感じやすいように制度が充実しているのだなと感じました。

今まで遠い存在だった生命保険というものが、母の話を聞いたり、自分で調べてみたりして、理解を深めるうちに、人生のあらゆるステージで活躍していることを知りました。自分自身の生活の基盤を固めるステージ、家族も含めて支えるステージ、そしてより心豊かに穏やかに過ごしたい老後のステージ。その各々のライフステージで必要となる保障が異なってくるのではないかと考えます。

私達はそう遠くない将来、自分で実際に保険を選ぶ立場になります。そのとき、その節目で最適なものを選べるようになっていたいです。そして、普段は意識する機会は少ないけれど、いざというときに気持ちと命に寄り添ってくれる生命保険というお守りを決して忘れず、大切にしていきたいと思います。そのお守りはいざというときに、最大限の力を発揮してくれるはずだから。